



オリカルクムの記憶

一  
水神の裔

峯村  
明

# オリカルクムの記憶 1

[はじめに](#)

[登場人物](#)

[水神の裔](#)

[001.](#)

[002.](#)

[003.](#)

[004.](#)

[005.](#)

[006.](#)

[007.](#)

[008.](#)

[009.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

## はじめに

水つ早湖（ミツハ湖）のほとりに住む竜門渕家は水神を始祖とする古い家柄。十五歳の少女めるのはその後継者である。

明治41年、水つ早湖の底から大量の石器が引き上げられた。水中遺跡発見のニュースは各界の専門家、好事家に一大センセーションを巻き起こしたのだったが、十七年経った今は熱気は冷め、すっかり忘れ去られていた。そんな水つ早湖にヨーロッパからひとりの男がやって来た。

## 登場人物

竜門渕 めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者 15歳
竜門渕 遠野	竜門渕家の現在の当主 めるのの曾祖母
河合 保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ 14歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A. V. ラウレンス	ベルギー人の旅行者
おシゲ / 源三	竜門渕家の使用人

## 水神の裔

001.

あたり一面に霧が立ち込めている。勝手知った道ではあるけれども、目の前にとつぜん背の高い影があらわれて、めるのは、はっとした。霧をすかしてよく見れば、湖岸に生えているカエデの木だ。

よく晴れた日の早朝、湖岸の町に霧は珍しくもない。湖上に生まれる霧は湖もそのほとりの町の家々、電柱、駅舎、なにもかも、柔らかく不透明な白い色のなかに覆い隠してしまう。

素足に履いた下駄の歯が、ぱきり、と小枝を踏んだ。

霧の濃い日は行動をためらうのか、鶏もスズメも鳴かない。鳴いたとしても、霧に吸われてしまうのかもしれない。シジミ採りの舟の出も遅い。湖上で互いの舟や方角を見失うからである。

目に見えるもの、耳に聞こえるもの、なにもかも、柔らかくやさしい白の向こう側にある。そしてめるのは、この世から隔絶されたような白の中にたたずみ、しっとりとした土に足跡を刻むのが好きだった。

湖のほとりまで足を運び、水辺に立ってその中をのぞき込む。呼吸を整え、気持ちを鎮め、おごそかな気持ちで。占い師が導きを求めて水晶球をのぞき込むように。日々繰

り返すその瞬間がめるのは好きだった。

めるのが生まれた竜門渕家と湖は、悠久の太古から一心同体なのだ。そう伝えられている。

めるのの黒目勝ちの目がふと当惑する。今朝の空気はひんやりと落ち着き、彼女の内にも、外にも、乱れるものは見当たらない。しかし湖にはわずかにさざなみが立っていて、それが彼女の心をとらえた。

ふり仰いで、まなざしを空へと移す。もちろん、なにも見えない。

けれども、めるのはひとりごちた。「お天気が、変わりそうだわ——」

002.

水辺をあとにし、屋敷に続く石造りの階段をゆっくりと踏みしめてのぼって行く。足を小さな青蛙が横切っていくのをほほ笑んで見送り、裏手から母屋の敷地に入った。そのまま奥の野菜畑へ行こうとして思いとどまり、母屋の縁側から家の中へ声をかける。

「ただいま戻りました。——おばあさま——？」

めるのは返事を待ち、耳をそばだてて目をしばたいた。そしてあわてた動作で蹴るように下駄を脱ぎ、廊下を走った。「おばあさま！！ おばあさま！？」

\*

曾祖母・遠野は、いかにも不機嫌そうに、無遠慮なあくびをした。

「ごめんなさい、まだ寝てらしたのね」きちんと膝をそろえてめるのは小さくなっていた。

「なんだい、まだ夜明け前かい！」

「ごめんなさい、おばあさまー。どうかなさったのかと思ったのよー」

遠野は、ふん、と鼻をならした。「めずらしくいい夢をみてたんだ、どうもしやせん！ それよりおまえはこんな時間になにしてるんだい」

「南の岸を見回って、栈橋をお掃除してきましたわ。それから野菜畑へ行くところでした」

「しっかりもので働き者の孫をもって、あたしゃしあわせだよ！」

老婆は卑屈な物言いをした。熟睡していたところを起こされたので、よほど虫の居所がわるいらしい。

「おばあさまー、私やおシゲさんがなんでもやりますからー……」

「朝っぱらからたたき起こしといて、よく言ったもんだよ、まったく！」遠野の不機嫌はおさまらない。「若いうちにさっさと自由になっとくんだった！」と、どういう関係があるのかまるでわからない繰言がはじまってしまった。「姉や妹たちはいい相手をひつつかまえてとっとと出て行っちまって！いきそこなったあたしがむこをとらなきゃならなかった！」

「あら、でも」

いつもきまって長くなる話をきりあげようと、めるのはすかさず口をはさむ。

「このあたりの土地が大きく開けること、おばあさまはずっと前から、わかってらしたんでしょう？」

### 003.

浦賀に黒船がやって来て江戸のお城が右往左往していた時代のこと。

幼児遠野は舌足らずな口で予言した。

「きしゃがくるよ。くろいけむりをはいて、きしゃがくる」

内陸の山に囲まれた湖、そのほとりに開けた小さな温泉町に、『けむりをはくきしゃがくる』というのだ。突拍子もない幼児の予言は周囲をほほ笑ませた。

この土地は江戸時代から続く街道の宿場町だが、街道でただ一ヵ所、天然温泉を有し、湖岸にある。別の言い方をすれば、ほかに取柄がない。西から東へ、東から西へ、ただ人が通りすぎて行くだけである。けっこうな高地な上に結氷する湖は外気温を下げる。一年の半分近くがきびしくも陰鬱な冬なのだ。

そんな土地に、近代的交通手段が大量の人と物資を運び込む時代が来るといふ。

戸惑う町長に遠野は観光という目新しい概念を打ち出してみせた。人々が来て、景色を眺め、温泉につかり、心身を癒し、旅を楽しむのだ。受け入れる側はどれほど潤うことだろう。『観光』というもので我々は身を立てることができるのだ。

町長が予言者遠野のご託宣に迷っているうちに思いがけないことが起こった。地元の生糸業者が国外で高い評価を受け、一大産業へ発展したのだ。国外を視察してきた創業者は地元愛の篤い人物で、遠野の描くヴィジョンを後押ししようと申し出た。

結果、地元の資本によって小さな温泉の町は華々しく発展することになるのだが、それは遠野の目算よりも少し……五十年ほど向こうへ……ずれた。反対派やら慎重派やらが抵抗したのと、国民が総動員された戦争のためである。

あたらしもの好きの遠野は、己の生涯を旧態依然としたなかですごさねばならないとわかってすっかり鬱屈し、毒舌に磨きがかかったのだった。

「だいたいこの家系はね、呪われてるんだ」とは、主にあるまじき暴言である。「だってそうじゃないか！」

水つ早（みつは）湖という湖のほとりに棲む一族、竜門瀨家とは、その始祖は水神であり、女の竜が存在したのだという。ゆえに一族には女しか生まれず、主はすべて女性である。そして数百年に一度、目を見張るようなたいへんな美少女が誕生することがある。それは女神のごとき始祖が人の姿をとったときの容貌に生き写しであるというのだ。だが彼女は必ず十代半ばの年齢で夭逝するのである。

そうまで聴くと、めるのは言わずにいられない。「私はもしかしてもうすぐ死んでしまうのでは……」

竜門瀨家の人間はおおまかにふたとおりいる。ごくふつうの者か、並外れて特殊な能力を持つ者か。遠野は明らかに後者であり、そういう者が代々、主を務めてきた。

遠野はじろりとひ孫に目をやり、「そんな心配は無用さ」となぐさめた。「おまえは、あたしによう似ている」

めるのは、えっという顔でひからびてしわだらけの老女を見る。

「なんだい、その、自尊心思いきり傷つけられましたって顔は。おまえはあたし以上の力を持つてるんだから、あたしの跡を継ぐんだよ！」

台所から鍋釜が触れ合う音がきこえてくる。別棟に住むお手伝いのおシゲが起きてき

て、朝げの準備にかかっている音。めるのは傷ついた自尊心を撫でさずり、お手伝いしてきます、とつぶやいて、曾祖母の寝所を辞した。

#### 004.

さてこちらは湖をはさんだ対岸、古くからの温泉宿が集まる小さな町。

温泉宿『かわいや』の亭主は、いかにも気乗りしない顔で帳場でため息をついていた。出かけなければならないのだが、どうにも気がすすまないのである。

数日前に竜門淵のあるじから舟を出してほしいと頼まれていたのだ。畏れ多い依頼だが亭主はあの老婦人がどうしたって苦手なのだ。

旧家・竜門淵の女性たちは並以上の美形か、あるいは、容貌には恵まれないがその分、特殊な能力に恵まれる者か、おおまかにその二通りであるという伝統があり、現在のあるじは自他ともに認める後者であった。

とくべつな力があって気難しくて口がわるい、さらにみてくれが……どうも……とくれば敬遠したくもなるのが人情である。その老婦人とふたりきりで舟に揺られるなんていうシチュエーションは、亭主には災厄以外のなにものでもないのだった。

そんなわけでぐずぐずぐずぐずしているところへ、せがれが帰ってきた。

「どしたんだ、保（やす）、学校サボリか？」じろりとごつい顔を向ける。

「おかえりくらい言ったらどおでえ、今日は半ドンだよ！ かあちゃんには昼飯だって頼んであるぜ！」

「はんどんだあ？」親父は片手に握り飯をつかみ、口をもぐもぐさせながらいった。

「おい、親父——それはもしかして——」

へへへへと親父はかわいた笑い声をあげた。「なんだ、昼飯が二人分あるから、はてな？ と思ったんだ」

「なにが、はてな？ だ！ 俺の昼飯は！？」

「いやこれがしまいのいっこ」

「なんだってー！！ ひとの分、食っちゃまったってのか、かえせ俺の昼飯ー！！」

ええい、男がこまかいことにこだわるんじゃねえと言いながら、親父はふと妙案を思いついた。

「まてまて、これは俺がわかった。ひとつとっておきの握り飯を作ってやろうじゃあねえか」

「とっておきの握り飯って？」

「なんと！ 具は神川（かみがわ）の支流の、そのまた秘密の上流でしか獲れねえイワナの！ 佃煮だ！」

「なんだって……そりゃあ幻の珍味……」

「おおよ！ 神川の清らかな水で仕込んだ幻の名酒とセットで召し上がれば、互いをひときわひきたてるという、あの超高級珍味よ！！」

「その超高級珍味が握り飯のど真ん中にどーんと……！」

すきっ腹に生唾を飲み込んでうっとりしていると、親父が「愛するせがれよ」とほほ笑みながら優しく肩に手をおいた。

「幻級の握り飯、食わせてやっから、いうこときけや、な？」

遠くでかっこうが鳴く、のどかな五月の昼下がりだった。

## 005.

温泉宿『かわいや』のせがれ保ノ助は、握り飯をふところにしのばせ、出航の準備にかかっていた。

保ノ助は尋常小学校の九年生である。彼が十四歳の、大正十四年ころの時代は、いっしょに学校へ通った同級生のほぼ九割は、家業を継いだり修行に出されたりだった。上の学校へ進学するのはよほど頭脳と経済力に恵まれている者だけだ。温泉宿のひとり息子はもちろん家業継承組であった。もとより、学問には縁も情熱も、興味もなかった。

しかしこまったことに、保ノ助は家業も学問と同じくらい、情熱も興味も覚えなかった。毎日の仕事と生活にいっぱいいっぱいの父母をみていれば、ひとり息子の自分に他の選択肢などあろうはずがない、というだけだ。

まあ、豊ふきだの風呂場の掃除だのはまっぴらだったが、舟で湖にこぎ出すのはいくらか心が躍るかな、と綱を解いていると、「モシモーシ」と声をかけられた。

「へい？」と顔をあげてみれば、船着場には背の高い、立派な身なりの男が立っていた。

この田舎町ではほとんど見かけないその服装は毛織の三つ揃い。土埃にまみれた革の靴に大きな革の鞆。黒い縁のめがねが光っている。

気取った手つきで中折れ帽を取ると、その下から現れた髪は明るい茶色にやわらかく波打っていた。保ノ助はぼかんとその人を見上げた。外国人を見るのは初めてである。

その人は彫りの深い面にちょっと笑みを浮かべ、「こんニーちわ」と、言った。アクセントが『ニ』にあった。

「は、はい！　こんニーちわ！」

「チョと、オたずねしたいのですが」と、紳士は少々おかしいアクセントではあるものの、ていねいな言葉づかいで保ノ助に話しかけてきた。

紳士は、このあたりに宿屋があると聞いてきたのだが、見当たらない。あなたは知っているか、と言うのだった。彼の日本語はアクセントがおかしい上にあまりうまくなく、何度か聞きなおしてやっとそう聞かれているのだとわかった時は、保ノ助はへとへとだった。そしてがっくりと船底にひざをついた。

宿屋なら知ってる。うちだ。ひざをついたまま、すぐそこに見える我が家を指差し、「ヤドヤ！」と言うと、紳士は保ノ助の示す方向に目をやり、しばし絶句、そして「Herberg! Oh, God!」とのけぞった。

なにが「オウゴッ！」なんだと思ったが、お客さんなら邪険にもできず、保ノ助は紳士を『かわいや』へいざなった。

## 006.

外国人紳士はベルギー人で、アルベルト・フォン・ラウレンスという名だった。しばらく滞在させてほしいと言い、ひと月分の宿代を前金でぼんと狭い帳場に積み上げ、『かわいや』亭主は絶句しつつ二つ返事をするという器用な芸当をして引き受けた。

はっきりいって四十三年の人生でこんな大金を拝んだのは初めてで、こんな水辺の安宿にひと月も泊まろうという外国人はいったい何者だろうと詮索したのは宿帳に記帳してもらった後のことだった。

ラウレンス氏は縦書きの宿帳を横にして、墨と筆で苦勞して自分の氏名をサインしおえると、ふう、とため息をついた。

亭主は読めないそれをためつすがめつし、「えー、おそれながら、ご職業は？」と尋ねた。

ラウレンス氏は日本語を話すのは苦手らしいがヒアリングには長けていた。「職業は？」という問いに耳を傾け、うなずくと、「私は画家です」と応答した。

「画家さん!？」ついじろじろ見てしまう。

「そうです」

画家さんがまたなんでこんなところに？ と根掘り葉掘り聞こうとすると、ラウレンス氏は亭主をすいっと手で制し、「なにか飲み物はありませんか？」と言った。

「飲み物？ おっといけねえ、おーい！ お客様にお茶をお持ちしな！ お茶うけも

なー！」

亭主が、ささ、こちらへ、と土間の食事台に案内して腰かけさせると、ラウレンス氏はかるく頭を振りながら、大きながま口のような鞆をあけて中から風呂敷包みを取りだした。はて？ とおやじはそれに目を留める。どこかで見たような柄の風呂敷……

「いや。お昼ごはんを食べ損ねてしまいましてねえ、おなかをぐうぐう鳴らしていたら、こちらのご子息がこれをくれたのですよ。握り飯、というのだそうで……」

風呂敷包みからでてきたのは、まぎれもない、木の薄皮につつんでせがれに持たせた、あの握り飯ではないか。亭主が、あつと言う間もなく、ラウレンス氏は口をあけて思い切りよく握り飯にかぶりついた。握り飯の半分はいっぺんにその口の中に消えた。

大きくうなずきながら、彼はそれをよく噛んだ。やがてごくりと飲み込み、亭主の女房が運んできたお茶に口をつけ、「すばらしい！！」と叫んだ。

「とてもとても空腹だったのです！　なんておいしいんでしょう！　ごはん！　イワナのつくだ煮！　おちゃ！　最高です！！」

彼はさらに片手で残りの握り飯を口にいれ、片手でお茶を飲み、茶碗がからになると茶たくに戻し、満身の力をこめて両手で握りこぶしをつくった。見れば目に涙さえ浮かべている。

目の前でこれだけ感激されれば、もはや口をつぐむしかあるまい、と亭主は、ごくっとのどを鳴らして腹をくくった。

食べ物にむとんちゃくなせがれに持たせた握り飯に、どっさり詰め込んだ具。

今さらいえない。お客さん、それはイワナじゃねえ。ザザムシ（水生昆虫の幼虫）のつくだ煮だ。なんて。

## 007.

『かわいや』の対岸に位置する竜門淵家には専用の船着場がある。かつては専用の舟もあったそうだが今はない。屋敷には主とその孫、あとは使用人夫婦しか住んでいない、竜門淵家とは、ひじょうに古い歴史をもっているが、傍目には落ちぶれてしまった旧家なのである。

『かわいや』は月に一度、舟を依頼される。湖のまんなかあたりの小島、そこに祠があり、竜門淵の当主がそこで神事を行うためである。その日取りは毎月一定していない。その日取りもまた神事によって告げられるゆえに一定しないのだと言われていていた。

それにしても、さすがに腹がへった。親父からもらった幻の珍味入りの握り飯は客にやっちゃって、結局空腹のまま舟を出さなければならなかった。竜門淵の当主はなにしろ、時間にうるさい。親父からは「てめえ、こんな時刻になにしてやがる、さあ行け、とっとと行けい！」と追い立てられた。

なにしてやがるって、お客を連れてきたのにそりゃねえだろう！ と、口だけ動かし、営業用の笑顔で接客中の親父に、あっかんべーを見舞って、『かわいや』を飛び出してきたのであった。

乱暴に舟に飛び乗るとちゃぽんとしぶきが跳ね、その辺に浮いていたカモが驚いてばさばさと逃げていった。

いい天気である。見渡してみれば空も水も青く、湖岸には水面に張り出したカエデの新緑が美しい。腹がへってなくてこれからばあさんに会うのでなければ最高の昼寝日和なんだけどなあ、と思うのだった。

竜門渚の船着場に近づいてみると、栈橋にすでに人の姿があった。あーあ、とつい、ため息が出る。「遅い！！」と文句を垂れるばあさんが目に浮かぶ。なにしろ、竜門渚のばあさんといえは毒舌で有名なのだ。

しかし……さらに近寄っていくと……なんだか様子がちがう。ばあさんにしては背丈があり、姿勢もよく、遠めにも肌の色艶は若々しく、背に流して束ねた髪は黒々としている。

保ノ助は、げっと呻いた。ありゃあ、ばあさんじゃねえ！！ めるのおじょうさまだ！！

## 008.

栈橋ではめるのもまた戸惑っていた。彼女はこの町の生まれではない。汽車で山をふたつ越えた松本町の生家から、曾祖母・遠野の住む家へ来たのは五年前。十歳の時だ。

『かわいや』の保ノ助とはひとつ違いだが、男女七歳にして席をおなじうせず、の時代、かたや温泉宿のせがれ、かたや旧家のめるのは高等女学校の生徒。小さな田舎町に住んでいるのだから相手の存在は知っていても、顔を合わせる機会もなければ、話をしたこともなかった。

なぜ今日にかぎって『かわいや』亭主ではなく息子が船頭をやっているのか。めるの心はさわさわと波立つ。しかし、舟を依頼し、された以上、言葉を交わさないわけにいかなかった。

めるのは棧橋の上から頭を下げる。「お手間をかけます。祖母が少々具合がすぐれなもので、今日は私が参ることになりました」

その柔らかな声と白装束の肩にさらさらとこぼれる黒髪に保ノ助はぐいっと心をつかまれた心地がした。彼はしばしわれを忘れ、ついでに操船も忘れた。舟はみるみる棧橋に近づき、その舳先が棧橋の端を支える杭にぶつかりそうになり、悲鳴をあげたのはめるの方だった。

めるのはとっさに杭に駆け寄って突端を胸元に抱え込み、身を乗り出して残る片手で迫る舳先を押しやった。舟の上の保ノ助はぐらっと後方によるめき、「うわっ」と叫んで倒れた。

向きを変えられた舟は棧橋に沿ってしばらく進み、浅い岸に乗り上げてようやく止まった。舟に尻もちをついたまま、保ノ助はぜえぜえと荒く呼吸し、「た、たすかった……」と着物のそでで額の汗をぬぐった。

「あの一」とめるのが棧橋から覗き込んでいる。「ごめんなさい！ けがはありませんか？」と。

「ぜえぜえ……お、おう……すまねえ！　ありがとよ！　たすかった……！」舟に穴でもあけた日には、親父に大目玉くうところだった。

## 009.

竜門渚のおじょうさまを舟に乗せ、保ノ助は櫓（ろ）を漕いだ。しかし舟はまっすぐに進まない。櫓がうまく水を捉えない。緊張のあまり保ノ助はかちこちにかたくなっていた。舟はへろへろと蛇行し、漕いでいる自分が酔ってしまいそうだ。

あ……気持ちわるい……と青ざめていると、めるのおじょうさまの「ああ……」といううめき声が、背後から聞こえた。

保ノ助は思わず振り返って言い訳をした。「す、すまねえことで！　なにせ、不慣れなもので！　ちゃんと漕ぎますんで、しばらく我慢してやっておくんなさんし！！」

いいながら見ると、おじょうさまは姿勢よく舟の横板に腰かけて風に黒髪をなびかせ、うっとりとした目で遠くを眺めていて、振り返った保ノ助に驚いて見返してきた。

ふたりは上と下から見合った。長いこと、じっと、言葉もなく。びちゃん……と小魚が跳ねる音。やがて――

ぐうううう……ううう……

保ノ助の腹が盛大に鳴った。

枝垂れ柳が生い茂る小島で祠に祈りを捧げられるのを、保ノ助はじっとおとなしく待っていた。やがて、「あのう……」とおじょうさまの声がした。保ノ助が顔をあげるとすぐそこに來ていた彼女が、「どうぞ、こちらへ」と保ノ助をいざなう。

なんだろ、とついて行ってみると、彼女は祠に向かって手を合わせ、深く礼をし、供えたばかりの食物の盆を両手にとり、掲げて再び礼をして保ノ助に向き直った。

そして控えめにほほ笑み、「さ、いただきましょう」と、柔らかな声で言った。

祠に捧げられていた供物は、小さな握り飯と冷たい水。握り飯に具はなかったがほんの少し、塩が振られていて、それはどんな具よりも美味に、保ノ助には感じられた。水がまたうまい。

この辺は地下水が豊富な土地で、『かわいや』も井戸水を飲料にしているが、湖の対岸にあたる竜門淵の屋敷の井戸水は質が違うとしか思えなかった。

「あのお……いいんですかね？ お供え物いただいちゃって。バチ、あたらねえですか？」

保ノ助が尋ねると、めるのは、「だいじょうぶです」とほほ笑んで答えた。「ちゃんと、『いただきます』と、おことわりしましたから」

1・「水神の裔」

2・「五月の嵐」へ続く

## あとがき

このお話は『Salamander in the circle』に続くものです。

舞台となる水つ早湖は長野県諏訪湖がモデル、明治41年に発見された曾根遺跡という水中遺跡が実在します。

参考文献・『旧石器の狩人』藤森栄一著 学生社 1965

2024年9月24日 記

## 奥付

オリカルクムの記憶

1・水神の裔

2024年9月30日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

[「素材good」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---